

畠 山 保 男

1517年10月31日、マルティン・ルターは、ヴィッテンベルクの宮殿の礼拝堂の扉に95箇条の提題を貼り付け、討論を呼びかけた。当時のカトリック教会では、ローマの聖ペトロ大聖堂の改修工事の資金繰りのために、贖宥状を販売していた。これは罪の贖いのために教会が販売するお札であり、これを買えば聖書には記されていないが、「煉獄」にいる親族や友人の魂の滞在期間が短縮される、というのである。つまり、贖宥状の購入という行為による功績が、神によって嘉せられる、と主張された。これに対してルターは、「95箇条の提題」において「イエス・キリストが『あなた方は悔い改めよ』と語られた時、キリスト者の全生涯が悔い改めである、と言われたのである」、と主張して、人が義とされるのは行為によるのではなく、信仰によることを明らかにした。ルターの改革の主要な主題は、1. 聖書のみ 2. 信仰のみ 3. 恩寵のみ 4. キリストのみということである。これはカトリック教会の「聖書と使徒伝承」、「信仰・恩寵と行為」、「キリストとマリアおよび諸聖人の功德」という、「と」の論理に対する純化の試みだった。さらにカトリック教会の教皇を頂点とする聖職制度の否定と万人祭司の主張、この世の秩序を神の創造のままに保持しようとする「創造の秩序」という理解、この世を教会の霊的な統治と国家の世俗的統治という二つの領域に分ける「二統治説」を主張した。ルターの聖書主義は、今日世界最古のプロテスタント教会として認知されているヴァルド一派教会やルターより百年以上前のチェコのヤン・フスとフス派に遡る長い教会改革の伝統と繋がっている。その聖書主義に基づき、ルターは神のみ言葉を民衆に手渡そうとして、聖書をドイツ語に翻訳した。これにより読み書きを民衆が学ぶ学校制度が成立する。さらにジュネーヴのジャン・カルヴァンが掲げた「神にのみ栄光を」という標語は、「積極的禁欲」と呼ばれる勤勉と節約と与えられた職業を通して合理的な生き様を貫くエートスを信徒に与え、最初期の資本家がこのカルヴァン派信徒から出現し、議会制民主主義や人権における自由権の主張、近代市民社会の形成に大きな役割を果たした。最近ルター派教会とカトリック教会の間で、義認論を巡る一致を見たことも記しておきたい。

(キリスト教と文化研究センター教授)